

春治郎の記





昭和十年、年が明けそろそろ寒に入ろうとする冷たい夜、火鉢に両手をかざし、春治郎付きの家政婦、山口ミヨは云いにくそうに口ごもりながらきりだした。

六十燭光のランプが広い部屋を頼りなげに照らしている。

「奥さん、大旦那さんがこの頃少し変なんですよ。何かあったんですか？」

「変ってどんなふうに？」

「毎日のように膝を抱えて考え込んでいるのでそれとなしに見ていると、必ずため息をついているんです。それも気がつくのだんだん多くなってきたような気がするんですよ。

「どうなさいましたか？」と聞いた事はあるんですが、慌てて、いや、何でもないさ、何でこんな病気になってしまったのかと思ってため息をついただけさ、とおっしゃるんです。今も続いているんです。ただじゃあないと思うので若旦那さんに聞いていただいてはどうでしょう」

このところ、春治郎の容態ははかばかしくなく、殆ど寝たきりの生活だった。

去年の夏に生まれたひとみも含めて三人の子持ちとなっていた貞子にとって、子供たちの世話と、糖尿病の進んだ春治郎、江戸っ子気質の春治郎の妻のとり手の相手、さらに、住み込みの若い衆達の世話があり、とても貞子一人でこなせる仕事ではなかった。

そこで、半年ほど前からミヨに来て貰っていたのだ。

未だ二十五歳になったばかりでお嬢さん育ちの貞子にとって、ミヨは貞子より幾らか年配で大変頼りがいのあるお姉さんのような存在だった。性格も良く信頼のおける人だったので、住み込みで働いてもらっていた。その上ミヨは特別に用事のある時しか休みをとらず働いてくれた。

一日中いるので春治郎の様子は手に取るように分かるし、貞子は安心して任せ切っていた。

「分かりました。今日お店から帰って来たら主人にそう云って聞いて貰います。私が聞いてもどうせ云わないでしようから・・・

」

貞子はそうやって二人で食べる遅い夕飯を終え、卓袱台(ちゃぶだい)を離れた。

家政婦にはお膳を作って、家政婦の部屋に届けるのが風習〔ならわし〕だったが、ミヨの勤めが長くなると二人は親しくなっ

、「奥さん、一緒にいいですよ。その方が奥さんもらくでしょう。

」と、子供たちの食べ終わったあとの卓袱台(ちゃぶだい)で世間話をしながら一緒に食べるようになっていた。

家政婦になる人にもいろいろと事情があり、ミヨは若くして夫をなくし、二度目に嫁いだところの夫も死に、子も授からなかった

ので、家政婦になるか、女中に出る位の選択しか出来なかったよう

だ。縁談があると、「あの人と一緒にになると又旦那は死ぬよ」などと

かげで云う人もいてよく壊れた。家政婦とか、女中というのは女の駆け込み寺のようなものだった

。看護婦、家政婦派出所に籍を置き、仕事の無い時はそこで暮らす事も出来たし、手数料さえ払えばいつでも仕事はあった。

ミヨも派出所に戻るより、大事にしてくれる派出先でさえあれば

その方が気楽でいい。子供のいないミヨにとって、この家には可愛い盛りの三人の女の子がいて、子供たちを相手にするのも結構

楽しい事だった。子供たちの世話をする女は他にいたので、都合が悪くなれば直ぐ春冶郎の世話へ戻ればいいのだから気楽なも

のだった。

「おとうさん、山口さんがね、おじいちゃんがおかしいって云うんですよ。ため息ばかりついているんですって・・私が聞いてもいいんですが、あのおじいちゃんでは私に云うわけがありませんから、あとで聞いておいてくれませんか」

と貞子は夫の政治郎にいった。

店は自宅から歩いて五分とかからない所にあり、大通りを渡れば直ぐなので、若い衆達は交代で食事に来て寝泊りは店でしていた

。政治郎の夕飯は店番の手伝いをしている母親のとりが店で軽いものを用意してくれるので簡単に済ませるが、とりはそれが終わると

間もなく帰り支度をして自宅に戻る。客は遅くまであり、若い衆と一緒に十時、十一時まで修理などをして過ごしていた。

政治郎の帰りはそれからで、好物の赤貝で一杯やりながら貞子と過ごす時間は、一日の疲れを癒す大切なひと時だった。

「俺も少しは変だと思っていたんだよ、ため息をついているのは何回か見たから。でも俺だってあんな風になればため息はつくな

と思っていたから仕方ないと思っていたんだが、山口さんがそう言うならあとで確かめてみよう」

政治郎は貞子のお話を聞くとそう云って又、一杯飲んだ。

大谷春治郎は今年五十五歳、少し前までは東京青山にある大きな米屋の大旦那であった。

地道に米屋だけに精を出していれば、彼の故郷である丸亀にも凱旋出来たのだが、そうは問屋がおろさなかった。

山っ気が多く、つい魔が差し、相場に手を染めるうち、上がったたり下がったり、手練手管の相場屋のいい餌食となり一夜乞食になって思い知らされたが間にあう時ではなかった。

丸亀で米屋をはじめ、大成功し、もう一旗揚げると、東京に打って出たのは二十数年前の事だった。

両親と弟を連れて歓呼の声に送られて出た春治郎は、のぞみ通り大成功を収めたが、米相場に手を出し、その失敗で、故郷、丸亀にはもう二度と帰れないほど、無一文になってしまった。

出た時が派手だっただけに、多分丸亀ではいい噂の種になった事だろう。

もう故郷〔くに〕には帰れないと思うと、東京で鳴らした相場師の目にも涙の浮ぶ時があった。

特におとっつあんとおっかさんを失くした時は辛かったとよく言っていた。

全盛の時であれば丸亀に墓を作ってやれたのだが、とてもそんな事の出来る状態ではなかった。749

兄の久太郎も東京で事故で亡くなったが、その時も何もしてやる事が出来なかった。

あんなに世話になった兄貴なのに・・・

連れて来た弟も倒産のあと、横浜に行くと言って一人で出て行った。

せめてお遍路にでも行きたいと思うが、今となっては夢の又夢だ。

おやじもおふくろもさぞかし丸亀に帰りたかったろうなあ。俺だって帰りたいたいと思う時もあるんだから・・・同じ食えない

なら・・・いやいや、政治郎がここで苦勞して俺の借金まで返してくれているのに文句は言うまい。それに帰りたいたいのは俺だけで

、とりも政治郎も東京生まれの江戸っ子だ。政治郎やとりにこんな思いをさせていながら俺はいまだにこんな事を仕出かしている

。こんな思いをするならまだ、倒産の方がましなくらいだ、と、いたたまれぬ思いで日増しに春治郎の心は乱れていったのである

。

次の日、政治郎は春治郎の部屋に行き、
「おじいちゃん、具合はどうかね。」
と切り出した。そして家政婦に
「タバコを買ってきてくれないか」
と云った。ミヨは承知して
「ゴールデンバットでいいんですね」
と念を押してゆっくりと外に出て行った。
ミヨがいなくなったところで、政治郎が父親に優しく語りかけた

。「何だか、ためいきばかりついてどうしたんだい？」
ギクツとしたように春治郎は政治郎から視線を外すと
「そんなにためいきついてばかりいねえよ。そりゃあこんな具合
になってやりきれなくてため息も出るわね。震災〔関東大震災〕
の時、浅草から此処まで二十何里を自転車で来た俺がよ、今じゃ
あそのポストまでも満足に歩けねえ。寝てばかりいる俺が情け
なくて、ため息の一つや二つ出るってえもんよ。」
という答えは政治郎には何かわざとらしく、強がりのように聞こ
えた。

今日は無理なようだ。
この調子では又、もう一度聞くほか無いだろう。
タバコを買いに行ったミヨの「只今帰りました」という声が聞こ
えたので政治郎は春治郎の部屋から出た。791
政治郎がいつ又話そうかと思っているうちに一週間も過ぎ、大寒
に入った。

ミヨが旧正月の為、田舎に帰りたいので、と暇を取った日、朝か
らチラチラと白いものが舞い始めて初雪となった。
空を見上げて貞子は大雪になるかもしれないと思った。
家政婦のいない春治郎の部屋に昼飯(おひる)〔おひる〕の用意を
して入っていった時、春治郎は貞子に全く気付かず、放心したよ
うな表情で落ちてくる雪を眺めていた。そして目を閉じて手を合
わせ一心不乱に祈るさまが見えた。貞子は、誰をも寄せ付け
ないような雰囲気を感じて布団のわきにお膳を置くと、そうっと出
てきたのだ。

何かがあるな、と、誰もが感じていたがそれが何だか誰も想像が
つかない。
雪がだんだん細かくなってきて、今日は積もりそうな気配だった

。政治郎が帰って来て遅い昼食の時、貞子が
「おとうさん、おじいちゃんがね、何だか手を合わせて神様にで
もお祈りしているような感じなんですよ、私がおひるを持ってい
っても全然気がつかない様子なので置いてきてしまいました。食
べたんだか、食べてないんだか・・・」

というと、

「後で俺がみてるよ」

と云って政治郎は早めに食事を済ますと春治郎の部屋に向かった

。「寒いなあ」と言いながら入っていった政治郎の目に映ったものは、ふとんの上に顔を押し付けながら背中を丸くして苦しむ父親の姿だった。

「おじいちゃん、どうしたんだ、苦しいのかい？医者を呼ぶかい？」

と駆け寄った政治郎に

「政治郎、助けてくれ、俺が悪いんだ、勘弁してくれ……」

と縋り付いてきた。

「一体、どうしたんだい、何だか分からないがよく話してくれ」

「もう、死んでるかも知れないんだ、飢え死にしているかもしれないんだ……」

「誰が？」

「済まない、俺の子供だ、」

「エー——っ？嘘だろう？」

「済まない、だから気が狂いそうなんだ、助けてくれ……」

「一人か？」

「いや、三年生の女の子と一年生の男の子一人……」

「子供だけか？」

「いや、親もいる……」

「どうする気だい？三人も……それで何処にいるんだ」

「青山だ」

「青山って東京か？」

「そうだ」

「なんてこった……それでいつからだ」

「前は此処から一丁くらい先の渡辺蒲団やのわきにいたんだが、子供も二人になって人の目がうるさくなったので東京に引っ越した。その時はこんなじゃあなかったのだからいくらでも行けた」

「そんなに行かれたんじゃあかなわないよ」

さすがに温厚な政治郎も、ぶん殴っても解決しないこの事態に頭を抱えた。

「頼むから早く行ってやってくれ、お金があるわけが無い、米も炭も買えないで凍えて死んでしまったら……この雪で……」

政治郎は思い出していた。

青山中学の時、親父の相場の失敗で、米屋が破産しかけた事が二度あった。二回は何とか借金を返せたが、その時の借金も返そうと三回目に大きく勝負に出た親父は、二度と立ち上がれなかった

。米蔵に溢れるほどある米にも、連隊に納める為の山のように積み

上げた炭俵にも、赤い封印がされれば手を付ける事は出来なかつた。

三度目の差し押さえの時はとうとう封印を切る事は叶わず、あたら米の山を前にして食うに食えなかつたひもじい思いのある政治郎にとって、放っておく事は出来ない事だった。

「寒いなあ」と言いながら入っていった政治郎の目に映ったものは、ふとんの上に顔を押し付けながら背中を丸くして苦しむ父親の姿だった。

「おじいちゃん、どうしたんだ、苦しいのかい？医者を呼ぶかい？」

と駆け寄った政治郎に

「政治郎、助けてくれ、俺が悪いんだ、勘弁してくれ……」

と縋り付いてきた。

「一体、どうしたんだい、何だか分からないがよく話してくれ」

「もう、死んでるかも知れないんだ、飢え死にしているかもしれないんだ……」

「誰が？」

「済まない、俺の子供だ、」

「エ——っ？嘘だろう？」

「済まない、だから気が狂いそうなんだ、助けてくれ……」

「一人か？」

「いや、三年生の女の子と一年生の男の子一人……」

「子供だけか？」

「いや、親もいる……」

「どうする気だい？三人も……それで何処にいるんだ」

「青山だ」

「青山って東京か？」

「そうだ」

「なんてこった……それでいつからだ」

「前は此処から一丁くらい先の渡辺蒲団やのわきにいたんだが、子供も二人になって人の目がうるさくなかったので東京に引っ越した。その時はこんなじゃあなかったのだからいくらでも行けた」

「そんなに行かれたんじゃあかなわないよ」

さすがに温厚な政治郎も、ぶん殴っても解決しないこの事態に頭を抱えた。

「頼むから早く行ってやってくれ、お金があるわけが無い、米も炭も買えないで凍えて死んでしまったら……この雪で……」

政治郎は思い出していた。

青山中学の時、親父の相場の失敗で、米屋が破産しかけた事が二度あった。二回は何とか借金を返せたが、その時の借金も返そうと三回目に大きく勝負に出た親父は、二度と立ち上がれなかった

。米蔵に溢れるほどある米にも、連隊に納める為の山のように積み上げた炭俵にも、赤い封印がされれば手を付ける事は出来なかった。

三度目の差し押さえの時はとうとう封印を切る事は叶わず、あたら米の山を前にして食うに食えなかったひもじい思いのある政治

郎にとって、放っておく事は出来ない事だった。

でも、私だったらどっちがいいだろう、と貞子は考えた。一夜こじきといわれ、倒産し、さげすまれて此処の家の嫁になったから、その惨めさも解る。けれど、このような、妾と子供が二人もいて隠されていたなんて事が露見したらもっともっと嫌だろう。

いやいや、落ちぶれるのも嫌だ。

前にこんなに商売が良くなかった時、こどもを一人背負ってもう一人の子の手を引いて、汚れた着物に前掛けを掛けて歩いていたら、女学校の友達とすれ違ったことがあった。

勘当されてまで結婚した事は新聞に載ったほど有名な話だから、友達で知らない人はいなかった。友達も悪いと思ったのだろう、気がつかぬ振りをして行ってしまった。私も気がつかぬ振りをして一層下を向いた。あの時は惨めだった。

あの思いは一生消えないだろう。恥ずかしかった。

女の一生〔山本有三〕の主人公の允子(まさこ)〔まさ子〕が、必ず結婚するだろうと誰もが思っていた幼馴染の昌二郎を、外交官になった途端に同級生の弓子に奪われ、やむなく東京の医学校に進学するが、あの派手で男好きの弓子が、外交官の妻として、パリやロンドンで孔雀のようにきらびやかな生活を送っていると思つた弓子が、ある日電車に乗って学校に出かけようとしていた允子〔まさ子〕の目に思いもよらぬ姿で映つた。

ねんねこ絆〔はんてん〕に赤ん坊を背負い、両手に買い物らしき袋を下げ、くたびれた格好の弓子の姿が允子の目に入った時は信じられなかった。まさか、と思つたが間違いなく弓子だった。あれほど虚栄心が強く、並みの結婚生活を馬鹿にし、華麗な社交界を望んだ弓子の姿がそこにあつた。すぐ電車を降り、駆け寄つて笑つてやりたい衝動にかられたが、そのまま目をつむつた。あれと全く同じ思いでみじめだった。弓子は允子に気がつかなかったが、貞子は同級生に気がついてしまった。

だが、とりの場合は両方だと思つた。

どっちが良いという問題ではないかもしれない。

まあ、こんな思いをしていれば、まさか政治郎がこんな事はしないだろう。それだけが今の貞子にとって心の救いであつた。

だが、これは貞子の苦勞の幕開けの序章に過ぎなかつた。

「じゃあ行って来るよ、こんなに気が進まないで東京に行くなんて初めてだ」



(写真：とり)

店の入り口ではとりが心配そうに雪空を見上げていた。政治郎は番傘を閉じ、雪を払い落としながら母親に「急に街道筋の益田さんに頼まれていた物を思い出してね、この雪じゃあ店も閑だろうからちょっと東京に行ってくるよ」と何気ないように仕事にかこつけて言った。

「えっ、こんな日に大丈夫かい？他の日にしたら？」

とりは驚きと不安が入り混じった声で言った。

「うっかり忘れていたんだよ、他のお客さんと違って益田さんは一番大事なお客さんだし、いつもは忙しいからやっぱり行ってくるよ」

「そうかい？」

「ところでおばあちゃん、お金は幾らあるね？」

「幾らって十円か二十円でいいんだろ？」

「いや・・・百円無いかい？」

「百円？・・・そんなに何に使うんだい？うちじゃあ百円なんてあった事ないよ、そんな大金で何を買って来るんだい？」

「いや・・・買うのは幾らでもないんだけど、若しかして雪で汽車が出なくなったりしたら向こうに泊まるかもしれないから・・・」

「泊まってもそんなにかからないよ」

「まあ、心配だから持っていくだけで、使いやあしないよ、おじいちゃんのように遊んだりしないから大丈夫だよ」

「ハハハハ・・・そんなこたあ分かっているさ、政治郎じゃあ頼んだってそんな事出来っこないさ、じゃあ待っている、幾らあるか見てくるから」

と二階へ行く母親を目で追いながら、政治郎の胸は痛んだ。露見するのは時間の問題かもしれない事だ。何とかして隠しておきたいが、自信は無かった。

兎に角行ってみないと分からない。行ってみてそれから決めよう

と考えていると、母はかき集めてきた金を、何の疑いも無いよう

な物腰で政治郎に差し出した。

百円にはならなかったが、それに近い金を持って政治郎は汽車に乗った。

「親父の奴、俺がまだおやじの借金を払っている最中なのに、どうしてそんな女に子まで持たせ、生活させるほどの金を何処から出していたんだろう」

おっとり育った政治郎は、春治郎が時々、「借金を返すんだから、お金を少しくれ」などと云ってチビチビくすねていたの信じ切って

何処か知らないけれど返しているのだと渡していたのだ。

それほどの大金持ちではないが、政次郎の商売も少しずつ伸びていった。

「どんな女だ？芸者？何年もこっちにいたって事だが俺は全然気がつかなかったよ。あんなに綺麗な奥さんを持っている人はいないのに...何が不満なんだ？俺の友達のおっかさんでうちのおふくろほどの美人はいないよ、友達にもそういわれていたから、おやじには勿体ないくらいだ。それなのに他に女を作るとは何事だ。そいつの子供といえ俺のきょうだいになるんじゃないか？

どうやって食わせていくんだ？俺だって3人も子供がいる。

やっと食えるようになったばかりだ。上の子が三年生だと言うと愛子より三歳上じゃあないか。その頃から一体何してたんだ。

夜逃げ同様に東京から俺たちを連れて来たおやじなのに、おっかさんに何と言いつくす気だ。あの時は俺も中学に入ったばかりで子供だったけど、嫌だったなあ。宮仕えまでしたおふくろはもっと辛かったに違いない。俺はあの頃、差し押さえという渋谷村のおばあちゃんの所へ泊まりにいかされていたし、俺のいない所で何があったか知らないけれど、兎に角おふくろは毅然としていたなあ、あんな立派な女はほかに俺は知らないよ...そのおっかさんに何と云えばいいんだ」

まぶたの裏に今までの事が走馬灯のように浮んでは消えた。そんな事を考えているうちに汽車の振動と共に一日の疲れと寒さが重なった政治郎は深い眠りに入っていった。

がった一んっというショックと共に　うえの———っう
えの———っという拡声器から流れる駅員の声で政治郎は眠り
から醒めた。

〔現在の新幹線なら駅に着くと音もなくすべるように止まるが、
昔の石炭を焚いて蒸気で走る汽車は、連結する時、切り離す時、
大きいショックを感じて音も大きい〕

これから出陣だ、という気持ちで身震いするようだった。
青山は子供の頃、住んでいたからそれほど苦労しなくても行け
るのだが気は進まなかった。幸い雪は小降りになっていて傘の必
要は無い。

電車を降りて薄暗くなった町でもやはり地方の都市と違って人
は多かった。政治郎が青山中学に行っていた頃とはまるで違って
来る度に賑わいは盛んになっていた。その商店街を抜け、神宮前
を通り過ぎておやじの書いてくれた地図を片手に右手に曲がると
直ぐ八百屋が見えた。地図を書いてもらうほどの事は無いくらい
直ぐ分かった。八百屋の裏手に親子三人は住んでいる筈だ。こわ
ごわ覗いた家の中は真っ暗だった。子供が二人いるのに声もし
ない。

本当に死んでいるのかと思うと政治郎は入れなかった。

八百屋に人の気配がしたので声を掛けた。

「済みませんが、ちょっとお聞きしたい事があって・・・」

という、奥から恰幅のいいおかみさんが出てきた。

「裏の大野さんはおいでなんですか？」

と訊ねると、怪訝な顔つきで

「どちらさまですか、旦那さんのお身内のかたですか？」

と聞き返された。仕方ないので

「そうです」

と答えたらおかみさんは

「良かった、いつお迎えが来るかこのへんではみんな心配して
いたんですよ。多分、いますよ。どこに行くたって・・・」

と言葉を濁した。

今もいるが多分お金がかからないように電気も消して、練炭も
炭も儉約して親子三人ふとんにくるまっているのだろうとの事だ
った。

「しばらく病気で旦那が来られないと言うので、うちは八百屋で
食べる物は幾らでもあるから残り物などやっていたし、すぐそこ
の米屋でもいくらか掛けで売ってやっていたから何とかなってい
るけど、ひどいもんだよ。この辺の人はあれを見ちゃあ放っては
置けないから、みんなで話をして面倒見てたんだよ。早く行って
やるといいよ」

さすがに江戸っ子だ。情があるもんだと政治郎はおかみさんにふ
かぶかと頭を下げた。良かった。それで餓死してはいなかった

んだ、と思うと政治郎はふーっと気が抜けたようになった。もう暗くなっていて今日のうちに全部始末をつけるのは無理だ。店と自宅には泊まると電報を打っておこう。

三軒茶屋まで行けば、昔差し押さえの時世話になったおっかさんの兄弟のおじさんやおばさんのうちが何軒もある。今晚はどこかに世話になって明日一日で始末をつけようと覚悟を決め、目の前にいるおかみさんに、

「明日三人を連れて帰ります。お借りしている分を清算しておいで下さい。全部お支払いしていきますから。この辺でお世話になっていたところは全部支払っていきますので奥さんからも声をかけておいて下さい。若し、あとから出てきても払いますからご心配なくとお伝え下さい」

と云い、政治郎はおりん達の所へ向かった。

始めて見た父親の女に政治郎は愕然としていた。
子持ちの女が、三ヶ月も放っておかれ、生活出来ないでいると、
こんなになるものか。

芸者かと、ふと想像したが、目の前にいる女は生活に疲れ、やつれきって到底おめかけさんと呼ばれるような女ではなかった。

おりんは政治郎の前でたたみに土下座し、頭も上げない。
政治郎はいつも店にいるからおりんは政治郎を知っているだろうが、政治郎の方は始めてなので、三人を前にして呆然としていた。

幼い二人の子もおびえ、小さくなって母親の後に隠れている。
上の女の子は三年生だというのに、小柄で痩せていた。

「母ちゃん、あの人誰？」

と言う男の子の声がかすかに聞こえた。なんとも哀れでいたたまれなかった。

「まあ、挨拶はいいよ、話はおやじに聞いてきたから。みんなおなかが空いているんだろう？何でも好きな物をたべさせておやり、今から作るのが大変なら何でも取るといいよ、あしたはとうちやんの所へ行くんだからおなか一杯ごはんを食べてゆっくりおやすみ」

そういうと政治郎はおりにいくらかの金を渡し、

「私はその辺で用を足して来るからその間に夕飯でも済ませておいで、しばらくしたら又来るから」

と云って家を出た。

いつときも早く目の前にいる三人から逃れたかった。

信じられない現実から逃れたかった。

しかし、それが現実だった。

政治郎が自宅に戻ったのは翌日の夜も遅くなってからだった。早速、春治郎の部屋に行き、無事に引越しまで済ませた事を告げた。

「今はその辺に宿をとってあるから明日昼前に連れて来るよ、今日は遅いからもう休むよ」と云って部屋を出た。

春治郎はその後姿に手を合わせていた。

家政婦はその姿を廊下で見ている。

家政婦のミヨには貞子が一部始終を伝えてあった。実際にはどのように思ったか知らないが彼女は

「よくある事ですよ、奥さん、前に行っていた田舎のお金持ちの所では、跡取りさんにおめかけさんがいて、十人も子供がいるんです。だんなさんのおいでがあまりなかったり、お手当てが遅れると、子供を全部本宅に行かせ、十人ずらっと玄関に並ばせるんですよ、みっともなくしてご隠居さんがすぐお手当てを届けさせるんです、私はその時いたんですがご隠居さんのお世話をしていたので直接は見ていませんけど、子供も十人並ぶと壮観だそうですね、それでも本妻さんにお子さんがあるからいいようなものの、無かったら乗り込んで来られますから。こちらは旦那さんがいて良かったですね、これは人から聞いたんですが、本妻さんに子が出来ず、引き取ったおめかけさんの子どもの世話を本妻さんがしているんだそうですね、おめかけさんが乗り込んでくるのも時間の問題と噂しているそうですね、おめかけさんにとって子供は錦(にしき)の御旗(みはた)にもなるんですね。子供だけ取られておっぴり出される人もいますけどね。大旦那さんには若旦那さんがいたから良かったですよ。これもお金持ちだからですよ」

などと慰めてくれたが、貞子には何の慰めにもならなかった。

うちのお金持ちは昔の事で、今は貧乏暮らし、家政婦を雇うのも我儘な春治郎では誰も手に余るからだ。でも、こんな弱みが出たからこれからは少しおとなしくなるかも知れないと、貞子は思った。

それから半年過ぎて家政婦のミヨは大谷家を去った。
親子三人を引き取った代償は思いのほか大きく家計を圧迫した。

だが、怒って店に行ってしまうそのまま自宅に帰らなくなってしまうとりの一言で、悩んでいた政治郎は救われた。

「おじいちゃんの世話はおりにやらせたら？」

政治郎はぎくっとした。一瞬じっと母親を見つめてから言った。

。「いいのかい？・・・」

「ただめし食わせるほどうちは楽じゃあないよ。しかも三人だからね。ねえやもこの頃具合が悪くて、実家〔さと〕から迎えが来るっていうじゃあないかい？そのまま暇を出しておりに台所もさせるといいよ、私は店に行つてこつちには帰らないから好きなようにすればいいよ」

いつも店のあるじであるかのように、一日たりと店を離れず政治郎の手助けをしているとりには、お金の有るなしも、商売がどんな状態であるかも良くわかつていた。

何とか暮らして行く位の精一杯の生業(なりわい)〔なりわい〕の政治郎にそんな事が出来ないのは、店の内容を熟知しているとりが一番良く判つていた。重い病氣〔やまい〕の春治郎と、嫁の貞子と三人の孫達、住み込みの若い衆達、店の家賃も自宅の家賃も合わせれば相当なもので、いくら掛かるか一番知っているのはとりだった。

新たに三人が加わってもその分の生活費はどこからも出る訳はない。別に暮らすには、それなりの財産と毎月の生活費を出してやらなければならない。前に住んでいた渡辺布団やの近くの家が空いていたのでそこに一時住まわせているが、到底これから先そこにおいて食わせるほどの商売は急には政治郎には出来ないだろう。

あれから三人の掛かりのために、相当の借金もしてしまった。私さえ目をつぶれば済む事だ。

政治郎におやじの尻拭いをさせている以上、ろくでなしで先の無い亭主より息子を助けてやらなければと、とりが自分の気持ちを抑えて出した結論だった。

とりは東京から逃れて来た時から春治郎には何の望みも持っていなかった。ここに来てから駅前小さな店を借り、小間物屋をやつて何とか食べてこられたのも、私と政治郎が一生懸命に働いたからで、春治郎は未だ相場から手を引いてはいなかった。

相場と女遊び・・・これは死ななきゃあ治らないね。

「あの時からわかつていたよ。

だからといって女がよく相手にしたと思つたらあんな女じゃあね、私の方が手を引くよ。

春治郎さん、くわばら、くわばらと畳に頭を抱えてこすりつけた
あんたを見た時はみっともなく情けないくらいだったよ。
私より政治郎が可哀想だと思ったよ。
ぶん殴ってもやりたかったが相手にした方が負けだ。もっといい
女なら競争してもいいけれどあれではこっちが手を引くつても
んだ」

とりが嫁に来た頃、丸亀の両親や兄弟がいた頃は春治郎もよく働いた。

丸亀の名家の出である春治郎の三兄弟の事は、地元では幼い頃から有名な存在だった。兄の久太郎もアメリカに留学するほどだったし、弟の功と共に三人共、特待生として知られていた。

特に春治郎は商才に恵まれ、弟の功と共に丸亀で米屋として華開かせた。そのまま丸亀に落ち着いていられなくなった春治郎は、更なる飛躍を求めて一家を挙げて東京へ向かい、選ぶ道を間違え米相場に走り、一攫千金を夢見て足を踏み外してしまった。

店が大きくなって、商売だけに留めておけばこんなにはならなかったのに、相場をやりだしてから春治郎は狂ってしまった。

今度の事は親の死んだあとでよかった。

今度の事はとりの両親が若し生きていたとしても、帰るわけにはいかなかったであろう。

嫁いだ女に帰るところは無い。きょうだいはみんな世帯持ちだし、迷惑はかけられない。

政治郎さえいなければこんなところにも来なかったかも知れないと思っていた。今の希望は政治郎だけだ。そして政治郎の力になれるのは私だけだ、と思った。何もかも政治郎の為だ。

とりは政治郎だけいればいい、と前から思っていた。

あの女は女中にしておくのが一番だ。

どのみち、うちで育てなければ、追い出すわけにはいかないとすればこれが一番だ。

政治郎の方でも、うちに置いて食わせるのが一番いいと思っていた。

そう思っている、母親の手前、政治郎からは言える事ではない。

貞子も随分嫌だと言ったが、こんなにお金が掛かってはどうしようも無い。

とうとう玄関わきの女中部屋で三人共一緒に暮らす事になった。

当時、からだの不調を訴えていた女中も田舎に帰る事になり、そんな訳で女共もいなくなり、その分の掛かりだけ楽になった。

代わっておりんがおばさんと呼ばれて貞子と一緒に台所をしたり、春治郎の面倒をみる事になった。

貞子の負担は増えたが、贅沢を言っではいられない。三人分の食費が増えるのだ。今でもぎりぎりなのに頭が痛くなる。何とか切り抜けなければ、と貞子は不安な心を強い決心に代えていた。

おりんは子供と一緒にここで暮らせれば文句は無い。同じような年齢の子を持つ貞子は小遣いにどのくらい必要かが分かる。時々にくらか与えれば済む。

貞子の自由になる金など無いのだ。それで三人を置く事に納得した。

おりんの方は、何の連絡も無く暮らした東京での心細い三ヶ月を思えば、どんな苦勞だってする、と思った。さらに、こんな状態では、春治郎に一銭だって貰えるあてはない。

こんなところにいるのは嫌に決まっている。本妻のいる家でめかけがまるで女中の生活・・・近所の人もみんな笑っているだろう。

大旦那さんのめかけが本宅に引き取られて女中をしながら子供と一緒に食わせて貰っている、と近所ではいい噂の種だろう。口惜しい思いだが子供の為だ。おりんは諦めて毎日を過ごしていた。

飢え死にするよりはいいだろう・・・

二人の子さえいなければこんな惨めな思いをしないで済んだのに、と思った。一人なら女中でも仲居でも何でも住み込みで働ける。こんな思いをするならば、飯場でもいい、外で働いた方がいいが、二人の子供の学校を考えただけでもそれは出来ない相談だ。

我慢だ、我慢だ・・・と唇を噛んだ。

おりんはこんな事になっても誰にも何とも咎められなかった。どんな事をされるか覚悟して来たけれど、あの時とりはお店に行ったきりなので会ったことはない。それだけでも助かる。どんな騒ぎになるかと思ったが、騒ぎはあの日だけで誰も何も云わない。おりんはほっとしていた。春治郎の奥さんは何ひとつ言わなかった。

連れて来た子供達は実の親をとうちゃん、かあちゃんと呼んでいたの、政治郎と貞子の事はお父さんお母さんと呼んで区別した。

学校も裏の小学校に転校の手続きも終えて通い始め、貞子の3人の子供達は未だ幼かったの二人をすんなりと受け入れ、何の問題も起きることなく日々が過ぎた。

貞子の三人の子は次の日からまっちゃん、元ちゃんと呼んですぐに甘え、遊びだして何事も無く、春治郎を安心させた。

春治郎の病状はこの東京での一件で一層進んだようだったが、その後は落ち着きを戻して前より良くなったように見える。

三人の子もおばさん、おばさんと呼んでおりんに甘えた。おりんも子供達には敵わない。外聞が悪いだけで、なんとかうまく納まったような気配に、貞子も政治郎も安堵した。

表向きには、口にするさえ憚られるようなおぞましい事件に、かげでは何と云っているか知れないが、大谷家は人数が増えただけで、前のような貞子と三人の子の賑やかな声の響く以前の日が戻った。

玄関わきの六畳の間にも二人の子供はいたが、この部屋から子

供の笑い声の漏れる事は無かった。

連れて来た二人の子供は学校にも慣れ、幾らか元気になった。おりんの仕事は前いた女中達と同じく、洗濯や炊事、掃除が主だったが、朝の仕事の前に春治郎の所に行って身の回りの世話をする事が女中達とは違っていた。

貞子はそれについては一切口を挟まなかった。おりんは家政婦のミヨにあらかじめ指示されていたからだ。

家政婦の山口ミヨは、本宅に引き取られたおりんの立場はどんな物か、いい気にならず控えめがどんなに大切かを、十分に諭していった。それは家政婦の雇い主に対するそれと全く変わらないのだからと云って出ていった。ミヨは此処ではもう、めかけでは無いと言ってきかせたのだ。貞子は家政婦に感謝した。

その頃の貞子は一升五合から二升のごはんを炊き始め、大鍋に一杯の味噌汁も作る。病人も入れていつも八人から九人の大人がいて、それにまっちやんと元ちゃんとうちの小さい子供が三人いるから、それでも足りなくなる時がある。お昼は又炊く事が多い

。勿論夜は又炊く。本当に一人では大変な事だった。漬物を切り、佃煮などを出し、先ずは台所のわきの三畳の間に若い衆達のお膳を用意する。若い衆が一番先に朝ごはんを食べに来るのだ。その間に貞子はお店に行ってしまったおばあちゃんの朝食を作り、いつも決まった黒い重箱に詰めると紺色の風呂敷に包み、朝食を終わった若い衆達に持たせるのが日課となっていた。

迂闊なものを作ると、「こんな物、食べられないよ」ともどってきてしまうから、貞子はいつも真剣だった。この家は倒産したというのに大きな病院を経営する貞子の実家の食卓よりはるかに贅沢だった。だからいつでもお金が無いんだわ、と貞子は思った。

外にふき豆売りや納豆売りの声がするとどんぶりを持って駆け出さなければならぬ。とうふーと言う声も聞こえる。

買わなかったら間に合わないの朝は戦争だ。春治郎のお膳はもっと大変だった。糖尿を患っているから、医者にはいろんな制限を付けられているのに、これでは食えないなんて毎日困らせた。

毎日のように繰り返される春治郎の文句は、一応おりんが聞いておくようになり、それだけでも貞子は楽になった。

春治郎ととりの食事の支度が済むと三畳の間はおりんと二人の子の食卓となる。学校に行くから少し早い。

三畳と茶の間を挟んで3尺の廊下があり、廊下の西の突き当たりには男便所と女便所が並んでいてその南、茶の間の裏が風呂場だ。

貞子と政治郎と三人の子の食卓は、その奥の茶の間である。

前は家政婦のミヨとゆっくり食べていたが、今は夫とラジオを聴きながら食べるようになった。これだけ沢山いるとゆっくりなんてしている暇は無く、一日中戦争のようだった。

貞子にとっては一日中米を砥いでいるようなものだ。

春治郎はよく子供を背負ってたらいで洗濯をする嫁に「貞子にはいつか必ず洗濯する機械を買ってやるからな」といっていた。アメリカから入った機械で、目の玉が飛び出るほど高いのだそうだ。夢物語だ。女中のほうが手っ取り早くて安いのおじいちゃんは洗濯する機械だなんて変な事ばかり言っていて・・・と思いなながらも嬉しかった。貞子の夢だった。春治郎は今可哀想に子供に小遣いもやれない身の上だ。それでも子供たちは学校から帰って来ると、必ず

「ただいまーっ」と云ってとうちゃんの所へ駆け込んだ。おりんは僅かながら給料を貰ってはいたが、遠慮して春治郎に金を出す事はなかった。春治郎に対しては指示された事以外はしないようにしているようだ。それに子供に掛かる費用は自分で出そうとしたからだ。二人の子供達を待っているのは父ちゃんと母ちゃんだけではなく貞子の三人の女の子もまっちゃんと元ちゃんを待ちかねて、遊ぼう、遊ぼうとまつわりつく。ブランコや滑り台に乗らなかった、いや、おりんが遠慮して乗ってはいけないと禁じたそれらにも、キャツキャツと大きな声で笑いながら五人で遊ぶ姿が普通に見られるようになり、いつの間にか二人は大谷家の一員として認知されたように思われた。貞子も三人の子らに年中つきまとわれたのでは仕事に差し障る。こんなわけでまっちゃんと元ちゃんは本妻とりと三人の子供のおかげで今までであった見えない壁も無くなり、大谷家は豊かではないが以前の姿に戻っていった。

政治郎は時々、春治郎にほんの僅かだが、小遣いを与えていた。たまに父親から子供達に小遣いがやれるようにという心配りだった。

どうせこの親父はこの子たちが大きくなるまでは持つまい、と誰もが思っていた。外聞は悪いが、大谷大谷家はそんなわけで何事も起きず、2人の子も幸せに暮らしていた。ここまで来るのに約一年を要したが、玄関わきの部屋から笑い声も漏れるようになり、ほっとしているのは春治郎とおりんたち親子三人だけではなかった。事のあまりにも重大である事を感じていた店の若い衆達や出入りの人や近所の人達も、一様に胸を撫で下ろしていた。

そのうちに貞子は又、おなかが大きくなるのを感じて戦慄を覚えた。

女は子供を持つ事によって喜びも大きいですが、おりんの場合は独り身の方が良かったのではないか、いつ死ぬか判らないだんなの本宅で、子連れで女中をするよりましな生活があったのではないか、と貞子はいつも思っていた。

山本有三の女の一生に出て来る弓子のように、墮胎すれば捕えられ刑務所に入れられるような時代だ。

女は、妻はおなかに子が出来れば何人でも生む以外に方法は無いのか。墮胎は重罪だが貞子にはあのインチキ医師の所に、生活が苦しく、もう一人生まれれば育てていられない、と訴えて墮胎を頼みに来る貧しい夫婦や、事情ある女達の気持ちが良く分かった。

貞子も大きいおなかを抱えて、生みたくない、と思った事は何度もある。自分の意思と妊娠は全く別だった。

ここに嫁ぐ前想像した事と、ここに来てからの現実の隔たりは、誰にでもあるかもしれないが、度々貞子を苦しめていた。

これでお産は四回目になる。お産そのものはあまり重いほうではないが、つわりが一番嫌だった。

少しの間だけれど、このいやな気分は貞子を苦しめた。

「だんだん軽くなるというけどそんな事ないわ」

と思いながら吐き気をもよおしたので外にいた貞子は塀の近くにしゃがみこんだ。

少し離れた所にまっちゃんがいた。まっちゃんは泣いていたが、吐いている貞子を見て驚いて傍に寄って来た。

二人ともお互いに驚いて、

「どうしたの？」

とお互いに声をかけあった。

いくらか治まった貞子は、何故まっちゃんが泣いているのか良く聞くと、涙を浮かべながらまっちゃんは「学校でみんなが、めかけの子、めかけの子っていじめるの」と言った。この子はめかけを作った張本人の父ちゃんと、めかけのかあちゃんにはそれを言えないんだ、それでひとりで泣いているんだ、この子はこの子でもう世間の荒波を被っているのだと思うと、急に貞子はこの子が哀れに思えた。

今まであまり感じてはいなかった愛おしさを感じてまっちゃんを抱きしめるとまっちゃんは

「お母さん・・・」

と言うなり貞子にしがみついてしゃくりあげた。

この子は此処に来てからそれなりに耐えてきたのだ。どうせ一緒に暮らすのだから貞子はこの二人の子をもっともっと可愛がってやろう、と決心した。三人の子がまっちゃん達を素直に受け入れたように、偏見を持たずみんな仲良く暮らしていけばいい。おなかの子も、いつかは同じようにまっちゃん達とお仲間になり、一緒に遊ぶようになるのだから・・・と思いながらも複雑な心境の貞子だった。

まっちゃんと貞子の間には、誰も知らない繋がりが生まれていた。

元ちゃんもまっちゃんにくっついてきたからつわりで苦しむ貞子の手伝いを二人で何くれとなくしてくれた。

みんな良くなるなかで春治郎の容態も、暑い夏はなんとか越し、冬を迎えて又、みんなひとつ歳をとった。

正月も穏やかに過ぎ、節分も過ぎてやよい三月を迎えようとしていた矢先の雪の降る夜、二二六事件が起きた。

雪には嫌な思いが纏〔まつ〕わる。

青山に親子三人を迎えに行った日も雪だった。

作・ほりひとみ